訪中日誌

竹田鐵仙
鈴木哲雄

今回、第二次日本私立大学協会友好訪中団の訪中目的は教育事情の視察にあり、兼ねて中国の実情を肌で知り、歴史文化遺跡を見学して、中国への理解を一層深めようとするところにあった。その目的のために、北京――天津――北京――西安――洛陽――北京の十三日間の旅行日程が設定された。ただ凡その旅程は設定されたものの、実際に訪中する場所等は、我々の希望を聞いた北京の旅行総社と、該当地の旅行担当者との折衝において全て決定されるという具合であったから、目的地に着いてからでないと、どこを見学するのかということもわからないのが実情であった。次はどんなに行くのであろうかという一面の興味はあるが、しかし場当り的な面は避けられず、決してよいやり方ではないと思われる。この点については、中国側のおかれた種々の事情と、我々の認識不足の両者に起因するのであるが、かつての竹のカーテンといわれたような閉鎖的秘密主義から一変して、大いに開かれた国となった。そして民衆の生活の秩序が保たれ、我々が安心して旅行できたという点で、世界でも一、二を争う国ではないかと感じた。

まず中国の教育の現状について、第一次訪中団の成果と種々の調査から知り得た実情を簡単に述べ、そして以下日誌風に旅行の様子を綴り、報告に代える。（教育の実情は紙数の都合で省略）。

七月六日（日）　曇天　午後三時、東京九段の私学会館にて第二次日本私立大学協会友好訪中団の結団式を行なう。協会の専務理事事務局長矢次保先生が団長となり、団員二十五名である。団長より旅行の心構えを含めての挨拶があった。団員の中の最高齢で、旅を全うできるかの一沫の不安があり、躊躇もしたが、個人的な旅の目的には西安で三蔵法師の遺徳を偲びたいという切なる気持があり、敢て参加に踏みきった。

七月七日（月）　快晴　七時三十分成田空港に入り、出国手続を取り、九時三十分離陸。JAL783便。途中伊丹空港に立ち

寄り、北京へ現地時間、十四時三十分、予定通り到着した。着陸体制に入ると、ポプラ並木や、一面に畑地の黍や、民家や豚舎や農民など、みるみる目に入ってきて、異国に入る緊張感を折りまぜた強い興味が噴き出してくるように感じられた。北京空港は新装成ったばかりで、成田空港に劣らぬ風貌を備えているが、旅客が少なく、成田のあの華やかさはない。入国手続は手荷物がなかなか届かず、最新の空港ともう一つ歯車の嚙み合っていない一面を垣間見た感じである。旅行社の人との挨拶を終え、空港を出ると、四時をまわり、日本製のバスが待っていた。日本製のバスはクーラーもあり、人気がある。外は暑く、紫外線が強く、日本の柔らかい光と違った鋭さがある。空気の乾燥した大陸的気候である。空港より西南に向って北京市内までポプラ並木のの生い茂った一直線の道路で、これはすばらしい。北京市に近づくと、勤務を終えた満員の通勤バスや、二両連結のバスを何台も追い抜き、またトラックも自転車の中を縫うようにして走っていく。昭和二十五、六年頃に一瞬戻ったような奇妙な錯覚に陥る。通勤バスの人達は疲れた顔の無表情の内にも、何かを捜し求めるような目をしている。決して異国人に対する興味本位の目ではない。何かつかみたいといった目のように見えるのだが、この目は旅先のあらゆるところで見た目ではあるが、結局ついに帰国するまで、どんな目だったかということを言い得ることができなかった。

北京市内は至るところに数階建のアパートが建って、住居の近代化が進んでいる。夕食は蜀郷餐館でとった。おいしい四川料理である。

その後ワンフーチン（王府井大街）の人民市場の北側の東風劇場で京劇を観賞した。このあたりは東京の銀座に相当する繁華街であるが、ネオンサインや明るい街灯などないから、街は明るくなく、華やかさもない。日本の戦後の電力節約の頃の情景が、ふっと脳裏をかすめた。娯楽が少ないから映画や京劇などを非常な楽しみとしており、劇場内でも静かに聴くなどという雰囲気ではない。北京京劇院四団の出演で、三岔口、赤桑鎮、盗仙草、開天宮が出し物であった。三岔口は日本のお能で言えば、狂言に当る。軽業的な身のこなしがすばらしい。赤桑鎮は勧善懲悪的なものである。文化大革命に京劇が批判にさらされたことを思うと、随分と様変わりしたものである。疲れているのでここで切り上げ、二十一時十分北京大学方面に近いホテルの友誼賓館に着き、シャワーなど浴びて二十三時十五分就寝した。クーラーがなく、なかなか暑い。28℃。

七月八日（火）　四時四十五分起床。快晴。七時廊下に荷物を出す。八時別棟のホテルの食堂で朝食。ホテルはポプラの林に囲まれた閑静なところにある。各旅行グループのためのバスが数台待っている。九時十分ホテル出発、頤和園に向う。北京大学の前を通り、西に入り、田園の中を走る。直播らしいふぞ

ろいな稲が緑の絨毯を敷いている。教科書的な知識しか持ち合せていないから、北京でも稲作のできることを知って意外に思った。だが日本では北海道で稲作をしているのであるから、盛岡付近に相当する北京の緯度では、水さえ充分ならば、出来ても当然であると思い返したものである。ポプラ並木に囲まれた道路は朝のトラックの往きかいで、少し渋帯気味であった。

通訳兼案内者は師範大学の日本語科を出たばかりのうら若いすらっとした女性で、濃い緑のスカートを穿いている。さすがにまだめずらしい。比較的なめらかな日本語で、やはり四人組のために充分の勉学のできなかったことを嘆いていた。この人は梁さんという。梁さんは北京に再び、三たび戻った時、同じく勤めてくれた。

九時四十五分頤和園に着く。夏の日射しが目を射る。北京市の人たちの最大の遊園地のようで、たいへんな人出である。大きな湖と山を背にしたこの公園は広大で、平地がどこまでも続く変化のない北京一帯の一般的風景からみると、木々も多く、木の種類も豊かで、建築物もすばらしく、憩いの場にふさわしい。ここはもと清朝の皇帝の花園と離宮で、一七五〇年乾隆帝が造り、清漪園と名づけた。一八六〇年英仏連合軍に焼かれたが、一八八八年清朝末の慈禧皇太后が重建して頤和園と名を改めた。一九〇〇年また八国の連合軍に破壊されたが、一九〇三年再度修復した。慈禧皇太后が、軍艦一艘の建造費をこの公園に振り向けてしまったのだと言っていた人がいたが、公園が歴史的遺跡として残り、人々を益していることにいささかの皮肉を感ずると共に、戦争のおろさかを思わずにはいられない。だ現代中国において、このような華麗な建造物や遺品は、権力者が民衆から搾取して成ったものであるとみているから、技術に対する誇りはあったとしても、事柄においては嫌悪すべきもののごとき見方のようである。頤和園は約二百五十ヘクタールあり、万寿山と昆明湖から成っている。仁寿殿、東宮門、楽寿堂、長廊、排雲閣、智慧海、石舫など見るべきものが多い。このようなよい行楽地でさえ人々には笑いが少なく、顔はこわばって生活の疲労が滲みこんでいる。湖には何十艘というボートが出て、遠近に散らばり、夏の風情が一杯にあふれている。頤和園の中の聴鸝館で食事をし、十三時にここを出た。広大な公園をさっと見ただけであるから充分な観察もできなかったが、誇っていい立派な公園である。

再び市の中心に入り、天安門広場を通って故宮に向った。文化大革命の時は百万人という大群衆で埋まった広場は大変広い。昨夜は四人、五人というグループが、各所にある街灯を中心に、広場一杯に広がって談笑にふけっていたが、さすが日中は人もまばらである。中国では十二時から二時まで、昼食時の休憩時間に当り、各家庭に一時帰る習慣となっているようである。昔の城の壁は崩されて平地となり、僅かにほんの少しばか

りを残しているが、それとて見る影もなく、説明を受けなければわからない。それは古い中国を払拭してしまう営為のようにも感ぜられる。

故宮の入口の午門は三方城壁に囲まれた異様な雰囲気である。太和門、太和殿、中和殿、保和殿、乾清門、交泰殿、坤寧宮、欽安殿、隆宗門が直線に南北に並び、その左右に数多くの建物が配置してある。印象としては偉大な多くの建物と石畳と石階の石の文化である。奇妙に木はない。乾ききった強大な権力と凄絶を極めた権謀術数の場を想像する。このような場で政治をとるものは、強靱な意志と権力欲を要しよう。日本人なるがためなのか、仏門に身を置くがためたのか、どうも肌に合わない。ただ頤和園のごとき離宮を必要としたろうことは頷けるのである。この文化財は権力の空しさを知るには何よりのところである。皇后が慈禧皇太后によって殺されたと言い伝えられる古井戸をみて、皇后を憐れんで何かしら人ごこちしたことに、いいようのないわびしさを感じた。遺品、絵画等も見た。ひどく疲れた。日程の強行もあるが、見学の内容にもあろう。故宮は二時間足らずでは見られるところではないが、今日のうちに天津のホテルに入るということで、十六時に北京駅に着いた。待合室は広い部屋で、二十脚ぐらいソファが備えてあった。

十七時三十五分北京発。軟車に乗った。広軌だからゆったりしており、内装も立派な汽車である。市の南端にある豊台駅を出ると、どこまでも続く平野の中を走る。線路の両側もずっとポプラかアカシャの並木となっている。集落に時たま汽車がとまる。縦横に道路添いに植えられたポプラ並木があるほかは、あとは見渡す限りの畑である。人とてほとんど見受けない。ちょっとした高低の変化があると、ひどくうれしい。広大だ。

十九時三十五分天津駅に着く。もうじき夕闇がせまってくるだろうという明るさである。駅前には人が一杯で、我々を見つめる。白い制服に赤い襟章を付けた警察官をはじめて見た。強い権力で民衆を規制している。十九時五十五分駅前からマイクロバスに分乗して友誼賓館に着いた。駅に程近く、街の大きな十字路の角にある八階建のホテルである。我々が着くと、またひどい人だかりができた。二十時三十分食堂で遅い夕食をとる。朝も昼も夜も食事毎にビールが出る。日本のビールの半分ぐらいの濃さである。少し飲んだだけなのにそれでも酔いが廻った。風呂に入ったり、次の日の準備、そしてブランディーをビールの濃さにまで湯で薄めて飲みながら、少し感想など話し合い、寝ようとしたら〇時二十分であった。ひどく疲れた。29℃。

七月九日（水） 六時起床。快晴。29℃。昨夜と温度に何ら変化なし。七時三十分朝食。朝食にはお粥が出る。梅干や塩昆布などを銘々取り出し、分け合って食べる。油物が多く、その中でお粥が出されるとほっとする。僧堂の小食（朝食）を想う。お粥を作るのは手間がかかるし、おいしくたくにはむずか

しいものであるが、よくたけている。

八時三十分出発、メリヤス工場に向う。川の岸の柳の下で沢山の人が雑談している。待業青年たちだ。働くところがなくて、働く場のできるのを待っている人達だ。人民公社と人民公社のはざまにある人達とでもいえるのであろうか。中国の社会主義も理想に程遠いものを感ずる。道路にバラックがずらっと並んでいる。地震で住むところを失った人達の差し当っての生活の場である。古いが立派なビルの間を通る。曽ての租界のあったところである。苦い気持が走る。

九時工場着。応接間で広報担当幹部の話を聞く。明朗でエネルギッシュな感じのする三十がらみの方である。この工場は四千五百人働いており、染色から縫製まで一貫作業となっている。メリヤスが中心産品で、外国に輸出されている。もと軍の倉庫であったが、一九三八年設立、八万平方メートルの敷地を持つ。一九七三年化織をはじめた。日本、フランス、東ドイツ、イギリスより技術を受けている。同行した工業関係の先生の話では、最新の設備も入っているとのことである。日本製の機械もあった。まだ花模様の種類も少ないし、企業管理がよくない、という反省の弁もあった。染色から縫製までの工程を見てまわった。黒板に作業状況の個人別成績表が張り出されているのには驚いた。外の掲示板には優秀な労働者が写真入りで出ていた。ついで保育園を見学した。よく訓練された踊りや歌で歓迎してくれた。元気のよい明るい子供たちだ。きれいな衣裳でお化粧までして日本の歌を歌ってくれたが、面映ゆい。教育にはそんな無理はない方がよい。地のままの教育を見たい。中国の童謡の方に率かれたのはそんな気持からであろうか。くったくのない子供たちだ。展示場を見た。純綿の袖シャツを買った。日本円で五百円程度だから大変安い。あとでこれを着たが、お陰で大変助かった。急拠業余大学を見学させてもらった。設備はひどく劣るが、熱心な勉学の姿には好感が持てた。英語の授業であったが中学程度であった。しかし勉強の目は輝いていた。日本の学生の大いに学ばねばならぬところだ。四人組の傷は深く、それから解放された彼らは、渇を癒すように勉学に志している。

十二時ホテルに戻る。33℃。昼食後四十分程度昼寝をする。少し疲れがとれ、気持がよくなる。

十四時三十分、河東中心小学校に向う。まず校長先生を囲んで話す。生徒数九百八十一人、二十二学級。労働、学習、礼儀、規律を重視し、智育徳育に重点を置いているということであった。教師五十六名、職員二十五名である。英語は三年より行なう。外国語は各学校で英、日、露語のうちから選ぶのであるが、殆ど英語を選んでいる。教科書代は毎学期一元、費用は毎月期二元、父兄が負担する。教職員の定年は男子六十歳、女子五十五歳で、転勤は少ない。重点中学校に入るための入試科

目は算数、国語、外国語である。重点中学校に入れるための特別の補習もし、家庭でも非常に熱心に勉強させる。おだやかに笑みを浮かべながら話す校長先生に、生徒に慕われる立派な教育者の姿を見た。あとで時間表を見せてもらったが、一年生から五年生まで火曜日のみ四時間で、あとは土曜日まで六時間であった。ついで授業参観をした。授業のレベルは高く、厳しい。特に国語、算数、英語のレベルが高い。図工はやや劣る。音楽ではピアノや胡弓を独奏してくれたが、家庭で特別教育をしているとのことであった。エリート小学校だけあってレベルの高い小学校教育をしていた。教材用具は乏しい。学校格差は日本よりずっと激しい。いずれこれは大きな問題となろう。マルキシズムの教育は中学校より行なわれるということであった。ある団員がふっと、それまでは救われる、といったのが印象的であった。

十七時半小学校出発。校内にはもう児童の姿はなかった。海上公園の中の動物園に行く。パンダを見せるためだったのだ。さすがにパンダは愛らしい。我々が見にきたために起こされて睡りを防げられたためか、いささか御機嫌斜めのようである。車に乗る時、案内者はアイスキャンディーを買ってくれた。案内者はよくそうする。気持はありがたいが、どうも……。天津の案内者は林さんという若者と、白さんという十七歳位の若さ溢れる女性とで、日本語を憶えようという意欲は二人とも相当なものだ。しかしまだあまりうまくなく、この旅行中最後までずっとついてきてくれた旅行総社の黄さんに、専門的用語の指導を受けていた。黄さんは三十七歳の女性で、日本語には堪能な、しかし厳しい口調の人だ。日本の各地を見学したとのことだ。事務の取仕切りに強い力を持っており、工場、学校、大学の幹部等も皆一目おいているようであった。車に弱いとか言っていたが、二週間の日程は厳しいようで、日程の最後に北京に戻った時、無事責任を果たせたためなのか、家庭に帰って子供に会えるうれしさからか、やっと女性らしい柔らかい笑いを見せた。それでも、翌々日には別の団体の案内がはじまるということを漏らしていた。中国の女性は職場でも男性に引けをとらない男勝りなところを何度も見たが、それは男性と対等の仕事をしているからである。

十八時二十分ホテルに帰る。同四十分夕食。二十二時就寝。31℃。

七月十日（木）　五時三十分起床、31℃。七時三十分朝食、八時三十分絨毯工場見学のために出発。町の中にはまだ地震の災害をそのままに残しているところがある。町の中や工場内の壁などの各所に、「工業学大慶」の文字が見える。日本の新聞などでは、大慶の場合、失敗と誤りがあったとし、批判されていると聞いたが、このようにスローガンがあちこちに見えるのは一体どうなっているのであろうか、と思った。しかし、後に

この八月になって、表立って大慶の工業が批判され、毛主席の肖像さえもはずされたことをニュースなどで聞いて、あのスローガンも他のスローガンに塗り変えられつつあるのだろう。

九時に工場に着いた。応接間で工場の説明を十七、八歳の女性から受ける。団長と対等に座して憶するところがない。従業員千六百人、そのうち女子は65％である。糸つむぎ、じゅうたん織、仕上の三工場からなり、製品の90％が輸出されている。天津市には工場が九つあり、糸を他工場に回している。風船マークのものが有名品である。絨毯は、天津には三百年の歴史があり、中国自体では二千年の歴史を持つ。織り方には北京式、彩華式、粗凸式、古典式などがある。香港、日本、アメリカ、西ドイツなど八十か国に輸出している。そしてそれは輸出公司を通している。工場長――主任――班長――組長という組織である。工場長は二人で、一人は共産党指導者が当っている。工場は公司の管轄下にあり、公司は軽工業局の管轄下にあり、その上に天津市革命委員会がある。公司に業余大学があり、工場から十数人行っている。技術学校があるが、小学校を出ると二年間ここで学び、そして工場に配属される。

中国文学の先生から、二千年以前に中国独自の絨毯があったか、それともペルシャと関連があるのかについて質問があった。工場側では中国に独自にあったと主張し、その資料もあるということであり、帰るまでにその資料を示すということであった。しかし多事にまぎれたたのか、返事はなくそのままになってしまった。

絨毯は手入れよく、そして虫を避ければ、百年ももつということであった。作業は一本一本手で糸を通していく手間暇のかかる仕事で、作業員も陰鬱な顔をしていて、一体に活気がない。中には公然と持ち場を離れ、屯して、噂話に花を咲かせている者もいた。辛気な作業にうんざりしているためだろうが、おそらく管理体制にも人の和を欠くような問題があるためだろう。昨日のメリヤス工場の活気とは対象的である。休憩をとりながら、製品を見て、早々に退出する。

十時十分工場を出て、十時三十分友誼商店にいく。みごとに黒い黒人がいた。コンゴから来たといっていた。陽気な人達だ。

十二時、昼食に戻る。また少し午睡する。

十四時三十分南開大学に向けて出発。三時十分大学着。故周恩来首相の母校である。校門から中心の建物まで長い一本の道となり、両側は広い池となっていて、薄紅の蓮が花を咲かせている。大学の広報担当と思われる方が出迎えてくれ、直ちに応接間に案内された。蓋付きの絵模様の入ったミルクカップのような茶椀にお茶を並々と注いでくれる。今まで応待されたところは、それはどこでもそうであった。水は一切飲めないので、お茶はありがたい。中国料理には中国茶は欠かせないし、口に

合う。同行のお医者さんの喜多代氏は、このお茶には脂肪を体に全部吸収させてしまわないような作用があるのではないか、と言っていた。栄養過多の日本では健康と美容から急激に消費が伸びているということを知った。なるほど土産物店では最高級品の鉄観音茶は売り切れていたものだ。

南開大学は一九一九年に建てられた文科理科をそなえた総合大学であり、中心大学である。九学科から成り、理科は化学、物理、生物、数学の四学科で、文科は国語、外国語、経済、歴史、哲学の五学科である。研究室及び周恩来記念館を見学した。研究室では哲学関係の部屋に織田仏教辞典と他の仏教辞典があるだけで、他に仏教関係のものは何もなかった。古典の思想書は少しばかりよいものがあるように思えた。記念館では周首相に関する資料を集め、研究がなされているということであった。学生は四千名、教員は千四百名、職員は千六百名である。一九六六年以前は学生数が五千名であった。今後年毎に学生数を増加させていく予定で、一九八五年には一万人となろう。四人組と地震の災害を受けた。（四人組についても災害のように見ている見方が面白い。）世界の二十箇国から留学生が来ており、日本人学生も五名いる。また二十数名の教師を外国から呼んでいる。一九八五年は留学生を三百名にする。大学院生は一昨年は九十名、昨年は百十名だったが、今年は二百名になった。敷地は千七百畝（十五畝＝一ヘクタール）である。北京中央教育部の直接指導を受け、共産党書記の指導のもとに、学長は分業責任を負っている。重点大学の学長は国務院（内閣）の指名による。文科系は三分の一で、あとは理科系であり、また男子が四分の三を占めている。教員千四百名のうち、教授は四十四名、助教授は七十二名、講師は六百名で、残りが助手である。教授の月給は三百元、助教授は百元から二百元、助手は六十元から七十元である。今年は入学率は五％であった。現在重点大学に入るには一定の点数を取ることが必要で、大学を落ちた者は二年制中等専門学校に入る。高卒の70％が大学を受験している。ここは全寮制を建前としているが、通学者は付属大学（分校）に行っており、約千名いる。図書は百十万冊あり、閲覧室には七百席を設けている。

説明を聞き終り、種々の質問応答の後、研究室と図書館を見学した。研究室には仏教関係は織田仏教辞典ともう一つの仏教辞典があるだけだった。閲覧室では休暇中に入ったというのに、真剣な学生の勉学の姿が溢れていた。数階の書庫に案内された。直ちに哲学宗教学関係を捜した。ほんのごく短時間の見学で書物をずっと見る間とてなかったが、マルキシズム、毛沢東思想に関するものが大部分を占め、仏教宗教関係の著書はごくほんの僅かしかなさそうだったのにはがっかりした。貴重書として別に版本などあるのかもしれないが、聞く時間の余裕さえもなく、残念だった。大体の印象として、仏教書は払底して

いるとみてよい。そして冊数は多いが、何冊も同じものが入っているし、仮綴のものも多く、重要な書物を欠いているのではないかと思った。十六時三十分南開大学を出た。もう少しゆっくり見たかった。

十六時五十分、文物商店芸林閣に行った。骨董品を扱っている店で、よい品物がある。十七時五十分出る。

十八時夕食。今日はむし暑い。今夜はサーカスを見に行くということであった。どうもありがたくないが、天津の旅行社との折衝で何とか見せたいらしい。私はひどく疲れていたし、明日は西安行きだから休むこととした。聞くところによると、公園の中の体育館で行なわれたが、大変な人出だったそうで、前半は曲芸が中心だったそうである。労働者の一番の楽しみのようである。中は大変な暑さだったそうで、前半で切り上げて帰ったので、九時ちょっと過ぎには皆戻ってきた。玄関でまた大勢の人だかりに遇っていた。

二十時就床。外では大勢の人声が夜半までする。暑いから外で涼んである。二十三時就眠。31℃。

七月十一日（金） 四時三十分起床、快晴。31℃。五時十分荷物を出す。五時四十分朝食。六時十分ホテルを出て駅に向う。

七時天津駅を出発、汽車で北京に向う。お茶のサービスがある。朝の汽車は爽やかである。来た時と同じ風景である。時折集団で農作業をするところを見る。

九時北京駅に着いた。北京駅は東京駅ほどの大きさはないが首都の駅の風格がある。

九時二十分バスで北京駅にごく近い西南の方角にある天壇公園に行く。梁さんがまた案内役を勤める。天壇は明、清二代の皇帝が天神を祭り、五穀豊穣を祈った場所である。公園の敷地は二百七十ヘクタールで、北の祈年殿から南の皇穹宇まで三百六十メートルが石で舗装されている。祈年殿は三重の紺碧の屋根を持つ円形の建物で、壁の朱とが映え、荘重さの中にあでやかさがある。緑と紅は中国的風情の基本色であるが、紺碧もあったのだ。そしてそれは確かに重みを増す色である。この天壇は嘗ての中国人の宇宙観、神観を象徴している。公園の中に古い檜の林がある。また花園もある。

十時半天壇公園を出て十一時北京駅にごく近い東北の方向にある日旦公園に回る。昼食をとるためである。公園はあまり大きくない。木々に囲まれた食堂でくつろいだ食事をする。

十二時公園を出て空港に行く。三十分空港着。十二時四十五分空港発、ジェット機で長安に向う。座席が翼の上で、その上天候も進むにつれて曇ってきて、地形が何も見えなかった。

十四時四十五分西安の空港に着いた。本曇り。ローカル空港である。北京の樹木の少ないところから、木々の茂った空港について、やっと潤いを感ずる。周、秦、漢、隋、唐等の十一王朝が都としたところで、歴史上からみて最も重要なところであ

る。仏教についても華麗な隋唐文化の中心を荷ったところであるから、私自身としては今回の旅行の目的地でもあった。空港から東し、西門添いに南に向い、それから東に向って南大門の南にある小雁塔に向う。

十五時三十分小雁塔に着いた。今は花壇のある小さな公園という感じで、境内の周りは民家が建てこんでいる。塔の前に、宋の政和六年（一一一六）の「大薦福寺重修塔記」があり、それによると、唐の高宗の崩後百日（六八四年）則天武后が創建して献福寺と称したが、天授元年（六九〇）改めて薦福寺とし、中宗が大いに営飾し、神竜二年（七〇六）寺内に翻経院を置いて義浄に訳経せしめてから、義学の道場となった、という。賛寧の『宋高僧伝』第一巻の最初に義浄伝を掲げている。それによれば義浄（六三五―七一三）は范陽の人で、童児期に出家し、十五歳で西域に行こうという志を持った。三十七歳（六七一）番禺（＝広東）から同志数十人と船に乗った。波涛を起え、二十五年間印度等三十余国を経て六九五年洛陽に帰った。経律論四百部近くをもたらし、金剛座の真容一舗、金利三百粒を持ち帰った。則天武后は上東門外まで出迎え、仏授記寺に安置した。それから西明寺、大先福寺で訳経したが、天后が翻経院を大薦福寺に置いたことより、ここが翻経の根拠地となった。華厳経、金光明経、金剛経等も訳出したが、何といっても律部が最も多い。全部で五十六部二百三十巻を訳出した。別に大唐西城求法高僧伝、南海寄帰内法伝等の貴重な書も著わしている。塔は洛陽竜門北の高い岡にある、という。寺内に十五級の塼塔がある、というがこれが通称小雁塔といわれるもので、それは大慈恩寺の大雁塔に対していわれるからである。今は上が少し崩れて十三級になっている。現況は柵が設けられて、内部を見学できないが、常盤大定、関野貞共著『支那仏教史蹟評解』一によれば、内部正面に厨子があり、その内に菩薩像が安置され、左右に五軀の仏像を列し、棚様の持送りを作って正面に釈迦三尊、左右に八軀の羅漢像があったという。今は碑文をまさぐり読み、塔を仰ぐのみとなってしまった。社会体制の違いから仏教は完全に廃れ、恐らくは広大な寺院であったろうその一角を残すのみとなってしまった姿に、いいようのない寂しさを感じたが、西安の第一歩を小雁塔に拝したことで、旅の疲れも癒された。そしてひととき、はるか昔のありし日の長安を偲んだ。

十六時鐘楼に着く。ここは北門と南門の間の南門側三分の一の所にある。楼に上って見ると、東西南北にそれぞれの門が真正面に当るのがわかる。ビルも少なく、土で作った平屋が多く、古い町並みである。昔、鐘と太鼓（鼓楼）で市民に時を知らせたのである。日本の禅林にも鐘鼓楼があり、今でも太鼓と鐘で時刻を知らせている。

十六時四十五分城内の中央の少し東側にある人民大厦に着い

た。大廈は前後の二棟からなり、中庭に木立と花園のある大きな立派なものである。後の棟に泊まる。風呂に入り十九時三十分夕食。十時就寝。今日は大変涼しい。二十七度ぐらいか。温度計なく不明。

七月十二日（土） 曇天。六時起床、七時朝食。

八時出発、大雁塔へ。大雁塔は小雁塔の東南、ホテルのほぼ真南の方向にある。西安は古い城壁が立派に残っていて、北京が完全に崩されているのとよい対照を示す。大雁塔は慈恩寺内にある。慈恩寺は長安城南八支里にあり、唐の貞観二十二年（六四八）皇太子であった高宗が、晋昌里の曲池に面した浄覚寺址に建てたもので、凡そ十余院あり、文徳皇后の慈恩に報いるためのものであった。寺が成ると三百人を度し、五十大徳を請じ、翻経院を作らしめ、玄奘三蔵を迎えて、上座として訳経せしめた。これより慈恩寺の名が海内に聞えた。玄奘を大慈恩寺三蔵法師という。高足二人あり、窺基は慈恩寺を嗣ぎ、圓測は西明寺を嗣いだ。法相唯識の根拠地である。大雁塔はもと五層で、六五二年玄奘の発願に成る。後に唐代に修復し七層とした。代々修復して現在に至っている。褚遂良の書になる「大唐三蔵聖教序」をはじめとして、多くの碑刻を蔵している。

玄奘（六〇〇―六六四）については、道宣の『唐高僧伝』巻四に載っている。詳しいし最も信頼のおけるものである。それによれば、洛州の人である。父は眉目明らかな八尺の体軀の人で、江陵の令であったが、大業末（六一六）洛陽に帰った。兄は長捷法師といい、洛陽の浄土寺に住していた俊秀であった。玄奘は兄に学び、十一歳で維摩経、法華経を誦した。また涅槃経、摂大乗輪を学んだ。道基に、従い兄と共に長安の荘厳寺に住した。それから四川の成都に行って阿毘曇を学んだが、毘婆沙論に至って、漢訳に違いがあって精理を極めることができず、この頃から印度に行って直接原文に当って学ぼうとする願いが胚胎したものと思われる。その頃既に玄奘の誉は高かったが、「一方に鑽仰せらるるは、未だ探賾を成さず」として、遠近もかまわず参学した。時二十九歳、大荘厳寺に住するように推されたが、「もし、生を軽んじ命にしたがい、誓って華胥（印度を指す）に往かずんば、何ぞよくつぶさに成言を覿、もって神解に通ぜん」とて、役人に出国を願い出たが、握りつぶされてしまった。その間諸語を学び、貞観三年ようやく勅許が出て、敦煌から沙漠に入った。苦難はすさまじいもので、またその学究たるや人智を越えるものであった。そのさまは高僧伝並びに自叙の『大唐西域記』に詳しく述べられている。高宗は玄奘のために大慈恩寺を建て、翻経院とし、国家事業として諸経論を訳せしめた。七十三部千三百三十巻となる。『大般若経』六百巻の訳出は、最後の文字通り命をかけたものであった。

慈恩寺は今も割合に広い境内を保存している。いったいに落ちついたたずまいで、観光客が多いにもかかわらず静かであ

る。大雄殿にて一片の香をたき、三蔵の像の前で写真を撮り、以って往時を偲ぶ。今回の旅行の個人的な目的の半ばは達したという満足な気持が湧く。

九時二十分大慈恩寺を起ち第一保育園に往く。九時四十分着。保育は林の中に囲まれている。すぐ応接室に案内され、五十がらみの婦人の園長先生の説明を受ける。どんな質問にも笑顔を絶やさず、適切に受け応えしてくれた。長征のことを二、三口にしていたし、児童の引きしまった、統制のとれた、落ちついた少し大人びた様子から、幹部子弟の子供たちが大部分であろう。子供たちの遊戯しているところや、唱歌をしているところや、ブロックで遊んでいるところなどを案内される。全寮制で、小さなベッドが三十ほどあろうか、ずらっと並んでいるところは可愛らしい。ただはねくり返るあの年頃に共通する騒々しさはなく、躾は相当厳しいようで、不自然な感じもする。可成り高度の保育がなされているようで、後生恐るべし、といった思いである。廊下などに「子供は一人」という産児制限のポスターが目についた。

十一時十五分保育園を去り、ホテルに帰る。十一時四十五分食事。

十四時出発、西安の東にある驪山を通過して、十五時秦陵に着く。途中、灞河、灞河を渡る。洛陽方面行の鉄道に添って行く。高さ千二百メートル余の驪山の麓を回る。遠く秦嶺（終南山）が波を打っている。秦陵は国道のきわに、畑の中にひどく土を盛った様子にある。高さ四十七メートル、周千四百メートルである。回りはきび、落花生の畑であるが、成育が悪い。干魃の様相である。馬が荷馬車に藁を山と積んで通る。その間を時々トラックが往き交う。まっ黒に日焼けしたみすぼらしい子供が、所在なく親の回りで遊んでいる。学校に行っているのであろうか。午前に見た第一保育園の子供と、この子らとは何という違いだろう。

もう一度車に乗り、秦陵の一・五キロ東にある秦代の兵馬俑坑を見学する。今まで曇っていたのがすっかり晴れた。暑い。一九七四年三月、公社の生産隊員が農業用の井戸を掘っていたところ、ものに当り、さっそくそれが伝えられ、陝西省の文物管理委員会が掘ったところ、地下五メートルのところから兵車兵馬のはにわが次々とあらわれてきた。これが第一号俑坑である。そして第二第三俑坑がその北側にあることが発見された。第一俑坑は東西二百三十メートル、南北六十二メートルの長さである。今はそれをすっぽりドームに蓋って発掘作業をしている。十五分の一を試掘したところで、武士俑が五百余件、陶馬二十四頭が出た。第一号俑坑では人馬六千件に近いと推定されている。陶俑は身長一・八メートルぐらい、陶馬は身丈二メートル、背高一・五メートルで、全て精巧に出来ている。人物の顔貌は異国人である。蒙古系であろうか。雇兵であろう。そし

て皆東を向いている。秦始皇帝は東に備えていた様子がわかる。発掘途中のところは皆前に寝るようにして崩れている。考古学者は一破片ずつ丹念に符丁をつけ、作業している。今から二千二百年余も昔のものである。中国の歴史の深さ、偉大な文化に驚きを禁じ得なかった。もはや言葉もない。

興奮も醒めやらぬ中を、車を戻して驪山の華清池に着いた。唐の玄宗皇帝の愛妃楊貴妃が入ったという温泉である。それは白楽天の「長恨歌」で余りにも有名である。近くは蔣介石総統が張学良に捕えられた西安事変発生の場でもある。今も温泉が出て保養地となっている。驪山は急な山で、華清池はその北麓、西安から距たること三十キロにある。柱などに朱をきかした瀟洒な建物としだれ柳の緑が池に映えて美しい。名残りをおしみながら十八時半西安に帰った。夕食は市内でとることにした。ホテルの食事が口に合わない人が多かったからである。

十九時半友誼商店に行った。そろそろお土産品の準備もせねばならなかったからである。充分に店の品を見、筆や硯などを買って、歩いてホテルに帰った。途中、日本語のできる大学生が話しかけてきた。日本の墓と中国の墓との関連を研究したい、と言っていた。いろいろな話を楽しくしながらホテルに着いた。日本語のできる人はすぐ話しかけてくる。非常に話したがっている。そして英語を学んでいる人たちは下手であると軽蔑した言葉つきで言っていた。中国人の日本語熱は相当なものだ。件の学生に、西安にもっと寺院が多いかと思ったが、少なく、唐の都と同じ頃の奈良の都を引き合いに出して残念がると、すまなさそうな顔をしているのが印象的だった。十一時十五分就寝。

七月十三日（日）　晴れ。六時二十分起床、七時朝食。八時五分出発、乾陵に向う。西安から西北西にある乾県の先である。六十キロ程のところだ。朝から暑い。涼しかったのは西安に着いた日だけである。渭水を渡ると咸陽である。秦の都であった。楚の項羽に焼かれて灰燼に帰したそのさまは「咸陽宮殿三月紅」と歌われている。今は人口二十七万の紡績を中心とした工業都市となっている。杜甫の反戦歌である「兵車行」に「耶嬢妻子走相送、塵埃不見咸陽橋」という一節を思い出す。舗装の道の両側は相変らずポプラや柳の並木である。柳は二種類ある。下に垂れ下るしだれ柳と、枝が上を向いた揚柳である。「折揚柳」という楽府などもあり、柳は古くから中国人の心をとらえ、生活に染み込んでいる。道路には相当の距離、ちょくちょく麦が一杯に乾してある。自動車が適度に脱穀の用を果たしている。やめるようになっているんだけど、なかなかやめてくれない、と案内者がこぼしていた。途中で観光バスが一台前部を破壊して止まっていた。トラックとぶつけたらしい。日本観光客の車であろうと思ったら、案の定そうであった。

乾県から北に六キロほど行くと乾陵である。乾県からしばら

くするとなだらかな丘陵地帯になる。その先に三つの小高い山があった。前の二つは乳房の恰好である。乳峯という。この山が天然の門戸をなし、乾陵の入口となる。もう一つの山が奥にあって一段と高くなっている。これが乾陵である。乾陵は海抜千四十八メートルにある石灰岩質の山に作られた。唐の高宗と皇后である則天武后を合葬している。陝西関中には十八陵あるが、比較的完全に保存されているという点、それに気宇広大という点で第一の陵である。『新唐書』によれば高宗は在位三十四年（六五〇―六八三）、弘道元年十二月洛陽の貞観殿で薨じた。時に五十六歳であった。文明元年（六八四）八月庚寅乾陵に葬った。則天武后は在位二十一年（六八四―七〇四）、神竜元年（七〇五）十一月洛陽上陽宮の仙居殿で薨じた。時に八十二歳であった。新竜二年五月庚申、高宗の乾陵に合葬した。宮殿の建築物は壊れて何もないが、文献の記載によれば、第一道門からまっすぐ北に御道を上っていくと、左側に下宮があり、更に西乳峯楼閣と東乳峯楼閣の間の階段を上っていくと、華表があり、更にもっと進むと、道の両側に石の駝鳥、翼馬等が並んでいる。これは今も残っている。馬は実物以上の大きさである。更に石人群が並び、左右に述聖紀碑、無字碑がある（現存）。その後に西闕楼東闕楼があって、ここから宮殿になっていたのだ。宮殿は山の廻りを城壁で囲み、中に西閣、東閣、献殿、霊亭があり、そこから墜道となって山の中に入り、石棺が安置されていたのである。その上に上仙観が建っていた。石人六十一体が隊列をなして並んでいる一角があるが、この石人の首はことごとく切られて異様である。高宗の葬儀に参列した外交官とされる。俗説では、流行病が蔓延し、異国人のもたらしたものとして切られたのだ、とも言っている。述聖紀碑は高宗の徳を讃えたものである。無字碑は武后が遺言して、己の評は後の世にまかせるとして書かなかったものである。今は書かれているが、それは明代に彫りこまれたのである。陵は盗掘されていないから、これからの発掘で、新しい発見もなされるであろう。陵から西を眺めると雄大な段丘をなしている。グランドキャニオンに匹敵するという人があったが、確かに雄大な眺めである。公衆便所による。ドアも何もなく、全くオープンである。尾籠な話だが、便は傾斜したコンクリートを下って、穴を掘っただけの肥溜に落ちる。この形はどこかで見たことがある。多分昔の農家のそれではなかったか、と思う。グランドキャニオンに向っての放尿はユーモラスな牧歌的情緒がある。

乾陵から帰る途中、永泰公主の墓を見学した。乾陵と乾県の中間に位置する。陪葬墓十七座の一で、一九六〇年から発掘されておる中の一つである。暗い墜道を地下に入っていた。公主の生活品を壁をくりぬいて陳列していて、地上での生活が冥界においても全く同じように行なわれる意味が示されている。現世が動的であるのに、冥界は完全に静止した寂静の世界であ

る。そして時間も停止している。副葬品が埋葬されたままで残っているから、そのように思える。それ故冥界は精神の世界となる。もし活動があるとすれば霊魂の活動のみとなろうが、時間の停止した活動とは一体何なのか。會ての中国人の冥界に対するこの辺のことはどんな考え方をしていたのであろうか。すばらしい壁画や唐三彩の陶器などがふんだんにあり、唐代の文化の香りが高い。

途中食堂に寄った。そして隣にある陶器工場を見学した。娘さんの作業員が二十名ぐらい土産物用の唐三彩の馬を作っていた。ゆったりした明るい雰囲気で、話しかけても決して手は休めなかったが、にこやかに笑いながら答えてくれた。天津の先進工場のようなギスギスしたところはなく、のどかであった。

十三時四十分、工場を出て、それから乾県に入った。途中繁華街で十分間だけバスをおろしてもらった。すごい雑踏で、車のまわりに忽ち人だかりができた。繁華街といっても、土づくりの平屋がごみごみと並んでいるだけで、日本の町のイメージはなく、農村の一寸したにぎわった集落といった感じである。露店も出てパン（小麦粉をこねてふくらし粉を入れずにそのまま焼いたもの。ちょっと堅いが食べていると風味がでる）を焼いていたが、食事が済んだばかりの上に、ほこりっぽくて、どうも買ってみる気が起こらなかった。ごく小さなスーパーといった類の店にも顔をつっこんでみた。北京や長安等の外国人観光客用の百貨店と違って、人々の生活に即したものを売っているから、民衆の生活を垣間見ることができる。品物は少なく、粗末な物が多い。日本の昭和二十年の中頃に近いであろうか。

十六時十分碑林に着く。碑林は西安の南門の内側のすぐ東にある省博物館内にある。博物館の先史時代以来の文物を見、歴史の深さ、文化の高さを思い知らされ、深い感動を覚える。碑林は古今の有名な石碑を一堂に集めており、今はガラスのケースに納められつつある。もう拓本もとれなくなる。拓本は現に値も高くなり、数も少なくなっている。禅宗関係で有名な「大智禅師碑」「圭峯定慧禅師碑」「興福寺碑」など立派な碑を目のあたりに見て、戦慄に似たものを憶える。何にしても見学時間が短かくて全く残念である。

十八時ホテル着。西安の旅の想い出に立派な食事をとることとして、十八時四十分一同うちそろって東亜飯店に行った。点心を入れて十七品である。酒は全興大麴がうまかったが、米酒（甘いどぶろく）が殊更うまく、ついついよい気持になった。見学の内容も充実して、酒のうまさが一段と増し、話に華が咲いて尽きなかった。食事が終る頃、コック長が挨拶に出た。皆共々料理をほめた。二十時四十分食事を終えホテルに帰った。二十三時二十五分就寝。

七月十四日（月）　快晴。五時五十分起床、七時朝食。八時五分出発、大明宮人民公社へ。八時二十分公社着。唐の大明宮

のあったところから名が付いている。応接間に通され、パネルを見ながら公社の幹部の説明を受ける。六十歳近い、少し肥えたいかにも大人といった風格である。

人民公社は二十三生産大隊、八十一生産隊からなり、農家四千戸、二万三千人である。一万三千四百ヘクタールの土地をもつ。主として穀物野菜を生産し、別に農具工場、日常生活品工場、加工工場、革製品工場、商店等の十七工場がある。トラックは三十二台、トラクターは大小、百五十台がある。解放前は土地の七十％が人口の僅か五％の地主に占められていた。一九五一年土地改革が行なわれ、五十三年共同組合を立て、五十五年初級合作社、高級合作社となり、五十八年人民公社となった。昔と比べ、土地は広まり、公社の所有のものも多くなり、千ヘクタールの荒地を耕して農地とし、百九十の井戸（深さ五メートル、水揚ステーション）を掘り、灌漑用地下水道は七千メートルに及ぶ。七九年を例としてみるならば、一ヘクタール当り八千余キロの穀類、同六、七万キロの野菜を生産している。発展したため、国家に奨品料として二百四十五万キロの穀物、五千万余キロの野菜、五千頭の豚、三万余キロの卵、二十五万キロの牛肉、三十万キロの果物を出した。公社員の生活は向上し、一人当り食料二百九十キロ分配したが、現金にすれば、一人百八十元に相当する。この生産の中には自留地（副業生産できる自己の所有地）は含んでいない。教育については、学校は二十校で、高校（小学校と中学校を含めた八年制）は三校ある。全員小学校に入る。病院は一つあり、合作医療坫（診療所）には赤脚医（はだしの医者。一年ほど医学の勉強をした保健婦のような人で、ふだんは農業に従事する）が八十一名いる。百貨店は一つ、商店は四つある。映画は一週間に一回上映され、生産大隊、生産隊にもテレビがあって、人々はそれを見に行って楽しむ。責任制があって、職場にそれを厳しく要求している。七九年三月奈良と姉妹都市を結んだことを縁に「西安奈良市人民友好公社」と名を改めた。公社は南北五キロ、東西十キロの範囲である。他の公社に比し発展は遅いし、日本の農業水準に比し遅れている、と謙遜の言葉で結んだ。日本と比しては兎も角、他の公社に比して劣っているとは思えない。大都市の近郊という土地条件もあるが、すぐれた公社である。このあと農家を訪問した。

ポプラの林の中の農家の集落は、六メートルほどの道路を挟んで両側に並んでいた。それぞれ門のあるしっかりした家並みである。七、八名ずつ三班に分れて、農家を訪問した。私達の班は十一人家族の家であった。六十歳位のおばあさんが一人待っていて案内してくれた。連れ合いは亡くなり、長男夫婦と子供、次男夫婦と子供、他に子供の計十一人である。子供達は町に働きに出て、毎日の生活は五、六名である。中庭の奥におばあさんの部屋があった。居間と寝室で、六畳二間といったとこ

ろである。夫の遺影が居間の片隅の机の上に飾られていた。しかし遺影だけで、花や蠟燭や位牌など何もなかった。ベッドの中央にトランジスターラジオが一台斜めに置いてあった。これがこの家の水準を示すのであろう。ベッドがオンドルになっていた。二、三着着物が壁に掛っていて、二脚ほどの椅子と、あと嫁入の時の長持があるだけのこざっぱりした部屋であった。家には自転車が四台、腕時計が七つある、というのが自慢のようであった。後に町の人にこの話をしたところ、この家庭は経済的に非常に恵まれている、ということだった、とある先生が告げてくれた。中庭の右には長屋のような形で三部屋ほど続いた間があり、子供、孫たちの部屋に充てられている。その向側の門に近いところに二部屋の炊事場がある。へっついである。日本ではもう遠くなった過去が現実に甦った感がしてなつかしい。主人と子供たちとの家の間の、角になった一寸した空間に、滑車のある小さな井戸があった。蓋がしてあり、注意しないと気づかないでしまうが、小さいが屋根つきの立派な滑車があったので気づいた。おばあさんはきさくに話してくれた。ゆったりした老後が推し量られる、落ち着いた明るい顔であった。

ついで養豚場を見学した。路がぬかるみ、豚の糞が所かまわずにしてあり、注意して歩かねばならなかった。子豚が何を思ったか勢よく走り抜け、つっと自分の豚舎にくぐり入ったので、皆吹き出した。養豚場の規模はそれ程大きくなかった。次に診療所により赤脚医の役割をいろいろ聞いた。診療室と控室と薬済室があり、応急の病人に対処できるだけのものが用意されている。次に公社管理の工場を見学した。ビニール製のかばんを作っている。やはり製品を見て日本にビニール製が出まわりはじめたことを思い出した。見学の間に、我々の歩んだ過去の想い出に繋がることが多く、それがついこの間のことであったり、二十年も前のことであったり、或いは三十年も前のことであったり、ひどくすると四十年も前のことであったりする。分野において、地域において異なるが、日本に二十年から三十年の遅れがあるということか。ついでに百貨店を急いで覗いてみた。百貨店といってもごく小さいスーパーマーケットみたいなものであるが、品物の種類はまだ少ない。しかし思ったより豊富である。布地の模様もカラフルになってきている。多分数年もかからず、都会の服装は一変するであろう。そしてそれは若者たちから始まろう。隣に小さな雑貨店があったので参考のために入ってみた。日本の戦中戦後の田舎にあったような店である。帰りに今は畑になっている大明宮趾に立ち寄った。この西に麟徳殿があったはずである。馬祖の弟子の鶯湖大義が徳宗に仏法を説いたところである。

十一時三十分ホテルに帰る。四十分昼食。

十四時十五分交通大学に向けて出発。交通大学は城の外の東南にある。大学は南路の南側にあり、樹木も豊かで、花壇もき

れいである。早速応接室に案内される。すぐ各分野の教授、事務長が顔を見せ、大学の概要を紹介した。五十歳位の教授が中心となって話を進める。エネルギッシュな熱弁家である。大学は八課程四研究所から成り、文革前は研究生も含めて七千八百人の学生を擁し、最大となったが、一九六一年から七一年まで新入生は入れなかった。七二年より入れたが、試験なしの労農学生で、彼らも昨年度で皆卒業した。現在は試験を受けた者が入っているが、七八年から研究生も募集し、研究生を含めて約五千人の学生数である。全寮制を採っている。詳しくは男子四千二百三十九人、女子七百六人、八十六％が十六歳から十八歳である。大学は四年制、研究生は二年と四年である。教師は千五百人、内、教授二百人、講師九百人、他は助手である。職員は二千人である。二十八学科、四十五研究室、五十四教育実験室、それに四つの付属工場がある。八五年までに八千人にする予定でいる。教師には研究生から採ることが多いが、他は北京の教育部を通じて採用する。人事は人事処の教師課によって採用され、学術委員会及び人事処教師課によって昇任は決定される。一年後助手、二乃至三年後講師となる。大学の教育は前期後期の二期に大きく分けられ、前期三年は基礎、後期一年は専門となっている。またカリキュラムは専修科目と自主科目に分別できる。学年制（前期後期のこと）についてもこれから研究せねばならず、卒業論文も出させるべきではないかということも考えている。二十科目修得後、工場に実習に行く場合もある。また機械科と電子科は後期一年で分かれる。四年間で二千五百時間の授業を受ける。卒業生は国家によって全国的に配置され、研究所や学校などに配属されもする。一に体力、二に政治、三に学業成績である。重点大学は学生を先に募集し、他大学はその後となる。大学の科目試験で五％が不合格となっており、彼らについては再試験を行ない、それに失敗すれば留年となる。留年は一～二％いる。そして一年に三回試験がある。四科目不合格は退学、三科目は留年、二科目は再試験である。研究費は決められたものは国家から支出し、大学としての研究は申請を出し、認可されて予算をもらう。二年から三年の留学生は十四名、短期は十五名おり、日本へは四名派遣されている。あと四名追加されるであろう。日本からも東大、京大、阪大の教授三名が来ている。解決せねばならぬ問題は、1長期教育計画、2理科、工科、管理科の三学科の総合大学にしようとすること、3プロ改革以前の水準に戻すこと、4科目を決めること。今は産品とプロセスによって課程が決められているが、これからは学科によって決められねばならない。5卒業生の学位、6進んでいる設備の輸入、7教科書の改革等である。以上が大学側の説明内容である。このあといろいろな質疑応答が行なわれた。交通大学という名の由来がわからず、質問が出た。もと汽車等に関係する学校であり、そしてそれが有名であった

ので、今もって名が残っているということであった。一八九六年上海に南洋公学が創設され、一九二一年交通大学と名を改め、四〇年重慶に移したが、四六年上海に戻し、五六年交通大学西安部と上海部に分かれ、それが独立したものである。このあと研究所を見学した。衝激の実験工場は大きな部屋に一・五米ぐらいの鉄の球が室中にぶら下がっていた。電子関係の研究所では電算機室を見た。まくしたてるような口調の説明が二時間も続いた後の見学で、団員全体に疲労が覆っていた。

十七時二十五分交通大学を出て、すぐ通りを距てた北側の興慶公園に入った。公園の入口はひどく紙屑が散らかっていたが、公園内はきれいであった。園内に奈良市が建てた阿部仲麻呂の真新しい記念碑がある。七曲橋を渡り、沈香亭の前に出る。亭の前は花壇になっている。興慶湖のほとりは大きな楊柳が立ち並び、湖に影を落している。湖の囲りの一部分を足早にみて花蕚相輝楼で休憩を取る。北京と比して西安は木が多く、心が安らぐ。

十八時二十分ホテル着。十八時五十分夕食。夕食後、西安でずっと案内してくれた催さんが部屋を尋ねてくる。何か話をしたがっているようであるが、核心部分に入らないままに別れなければならなかったのは残念だった。催さんは二十二、三歳に見える。工業関係の日本の書物を翻訳しているということである。若者らしく新しい何かを求めているようであり、少なくとも毛主席一辺倒の人ではないように思えた。明日の洛陽行きの準備で、荷物を整理する。二十一時二十五分就寝。

七月十五日（火） 快晴。六時二十分起床、七時荷物を廊下に出し、朝食を取る。食事を終えてすぐ西安駅に行った。駅はホテルの北方の北の城の外にある。北門の東である。古都の趣きにふさわしい優雅な建物だ。

八時二十四分発、洛陽に向かう。一番後の寝台車である。席はゆったりしていて立派なものである。28℃。すぐサービスのお茶が配られた。秦嶺が遠くに見える。十一時半ごろであったか、名山である華山が間もなく見えるというので期待した。その頃から右手が山に迫り、美しい山並みが続く。華山は高いが、思ったよりあっさりした山であった。次が潼関である。そして河中を出る函谷関である。黄河が時折、ほんの少しばかり遠くに姿を見せた。

十二時三十分車中食。食堂は一番前にある。硬車は中国客で一杯で、空席一つない。そして不衛生な感じがする。その中をかき分けるようにして進むのはうれしくない。戦後の買出列車に近い。食事は口が贅沢になっているのか、食欲が衰えているのか、あまり食べる気もしない。車中は34℃となっている。

十五時四十分洛陽に着いた。ホームは暑いし埃っぽく、そこから見た感じでは田舎町というところである。たくましいSLが操車をしている。町は意外に大きい。ホテルは友誼賓館で、

駅の西南の町はずれに近いところにある。十六時三十分ホテル着。洛陽は五十五万人の町である。盆地となっていて、夏はかなり暑いようだ。夕食を取り、風呂に入った。湯は黄色く濁っていた。湯を払うと少し泥が残った。夜は暑い。幸い少々音が大きいが、クーラーがあって助かった。二十二時十五分就寝。

七月十六日（水）　六時起床。曇天。

七時三十分朝食、八時三十分出発。竜門石窟は駅の南南東にある。洛河を渡る。昔の天津橋の趾を残す唯一の小さな亭のごとき建物が川のほとりにある。唐の時代、船を並べ板を渡して浮橋を作った。何度か水に流された。川の両岸のたもとに一対ずつの楼を作った。それが唯一として残っているものである。江戸時代の常夜燈のような形をしている。『景徳伝灯録』にある記事を思い出した。石頭の弟子の丹霞天然――この人は木仏を焼いて暖をとったという話で有名であるが――は元和三年（八〇八）天津橋に横臥していると、留守の鄭公がそれを見て呵した。丹霞は起きようともしないで、そして徐ろに「無事の僧なり」と言った。留守は異なる人と見て、衣を献じ、毎日食べ物を供した。それを聞いて洛陽のたくさんの人が帰信した、という話である。しばらくして左手に関林を見ながらなおも南進する。関林は関羽の廟で、この人はことのほか中国人に人気があり、神格化している。今修復中である。

三十分程して伊河のほとりに出た。品のよいアーチ形の橋が三脚連なってかかっており、下を水が悠然と流れている。橋を渡ると向かいが香山である。川添いに少し上ると右斜面（西側）に一面に仏像が岩に彫りこまれている。景色のよいところである。観光客が多く出ていて、しきりとカメラで家族や友達の写真を撮っている。この頃から少し雨が降り出した。中国に入ってから雨らしい雨ははじめてである。石窟は北魏時代の四九四年から彫り始められ、四百年の長い間、次々と彫られていった。石窟の全長は千メートルで、仏洞は千三百五十二、仏龕は七百五十、仏塔は四十余り、仏像は十万体を越えている。北魏時代のものは強靱さを、唐代のものは優美さをというように、それぞれ時代の特徴をあらわしている。どうも大きくてうまくカメラにおさまらない。奉先寺はその中でも中心をなしている。ここで一同記念写真を撮った。竜門の石窟については塚本善隆博士が著作第二巻で述べておられるが、北魏が胡族の習俗生活を捨てて洛陽に遷都した前後から仏龕が造り始められ、孝文帝が崩じ（四九九）、宣武帝が即位すると、朝廷の事業として、雲岡石窟にならって、孝文皇帝とその皇后のために二大石窟が計画され、そして代々続いてきたのである。それで遷都以前の雲岡の石窟と、この遷都後の竜門の石窟は一連の事業とみられるのである。

十二時昼食。今日ははじめて弁当が出た。乾肉、焼肉、卵、パン、リンゴ等が入っている。しかしどうも肉類はふだんあま

り食べつけていないから、勝手が違ってうまくない。先程来の雨は小降りになってきた。一行に日本仏教史を研究している先生がいて、今見た竜門の石窟の比較から、日本の国東半島の石像群も劣らず価値がある、と高く評価していた。ちょっとばかり椅子でまどろむ。竜門には義浄の塔が北の高岡にあり、菩提流支の墓が西原にあり、金剛智の墓が伊川の右にあり、神秀の墓が竜門にあり、義福の墓が奉先寺の北岡にあり、円測の白塔が香山寺北谷にあり、南陽慧忠の墓と荷沢神会の塔とが党子谷にあると、僧高僧伝類に記されていることを、常盤大定博士は『支那仏教史蹟踏査記』で列挙されているが、博士の詳細な踏査でも確たるものを見出されていない。我々はこれら高僧の墓や塔がこの付近にあるのだ、ということだけで満足しなければならなかった。

十三時川向うの石窟を見学する。竜門石窟群のちょうど向かいにあり、ここから竜門石窟を見ると、あたかも蜂の巣のようである。奉先寺はその中心にあって一際大きい。ここの石窟は丘の下の方にあり、簡単な門である。草生した中にひっそりとしている。看経寺というのがこの寺であろうか。もとは禅宗に関係したところと思われるが、それ以上のことはわからぬ。常盤博士は神秀の墓所かもしれないとされている。もう一つ石室があるのであるが、そこには案内されなかった。

ついで川添いに下って、橋の少し下流の香山寺の趾の白楽天の墓に参った。五十メートルほどの高さの急な石の階段を上ると、ちょっとした平地があり、そこに直径七、八メートルの円型の土盛りがある。これが白楽天（白居易）の墓である。白楽天は平安時代に日本に最大の文学的影響を与えた人である。それは李白、杜甫以上のものがある。ここはまた伏牛自在、丹霞天然が莫逆の交りを結び、一時住したところでもある。伊川がそこで右に曲って流れる。景色がすばらしい。白楽天は自らの居所を香山寺とし、自らも香山居士と称した。仏教に深い理解を示した人で、特に禅僧との交わりが深い。禅宗灯史では仏光如満の弟子とみている。憲宗は白楽天をつかわして興善惟寛に禅旨を問わしめている。また鳥窠道林との問答は有名である。まだ杭州の長官であった時、秦望山のよい枝ぶりの松の上に坐禅をしている和尚がいた。その側に鵲が巣くったので、鵲巣和尚と呼ばれ、また鳥窠和尚と呼ばれていた。或る日白楽天が礼謁して、頭上の鳥窠に、「禅師のおられるところは非常に危険です。」というと、鳥窠は「太守の危なっかしさはもっとひどいぞ」と答えた。白楽天は「私はこの地を安定させている、どうして危ういことがありましょうや」といった。鳥窠は「火が燃えさかるように、意識が激しく運転している。これを危険でないと言えようか」と答えた。そこで白楽天は「仏法の要点は何ですか」と尋ねると、鳥窠は「悪いことをするな、よいことをしなさい」と述べる。白楽天は「三歳の子供でもそんなこと

を言われればわかりますよ」と憤然として答えた。禅師は「三歳の子供でも言えることだが、八十歳の老人だって実行しきれないぞ」と言った、と伝えられている。事実の話ではないかもしれないが、興味ある問答である。

十三時五十分ここを発って洛陽に戻り、美術工芸所を見学する。絵画や陶器等を製作している。主に外国観光者の土産物となっている。洛陽は新しく発展した町と老城（古い町）からなり、老城は東側にある。昔のおもかげをそのままに残している。

十六時三十分帰館。十九時夕食。

十九時三十分民族演劇を見るため劇場に行く。古びているが割合と大きい劇場である。題は「奪錦楼」といい、一幕四場もので、地方に残っている古い演劇ということである。京劇と区別がつかないが、楽器は京劇ほど劇しくない。姉妹の婿選びで、婿は一は秀才、一は武人タイプで、それぞれがどちらを選ぶか迷っているところに、質産家が金と権力で横槍を入れるという筋立てである。第二場の終ったところで退出したので、あとの変化はわからない。二十一時半帰る。二十三時就寝。

夕食前に通訳兼案内をしてくれている王斌さんが来た。瀋陽の生まれで、大学を出て洛陽の工場に配属された、と言う。二十二、三歳の明朗な方だ。西安は通訳が十人いるけど洛陽は四人きりで、しょっちゅう駆り出されてつらい、と言っていた。今日本の工業関係の書が非常に欲しいとも言っていた。洛陽はベアリング工業が盛んである。宗教には関心がなく、また必要もないという中国人の一般的考え方で、日本人が宗教関係を見学したがるのをいぶかしがっていた。西安の催さんとは考え方も性格も違うようだ。洛陽は北京官話と少し違っているので、我々でも聞きとりにくい、と王さんは言う。北京や西安で通じた片言が、洛陽でどうも通じなかった理由がわかった。

七月十七日（木） 曇り後晴れ。

七時三十分朝食をとり、八時三十分出発。今日は白馬寺だ。九時十分白馬寺に着いた。老城を通り、城の東側を流れている瀍河を渡り、少し北に上って、竜海鉄路（ほぼ東西に走る）添いに東に行った、鉄道の北側に白馬寺がある。友誼賓館から四十分かかった。寺の前に等身大に近い土器の馬が据えられている。門は赤レンガ作りで、屋根がちょこんと載っている感じである。三つある中の真中の門をくぐる。大きい檜があって落ちついた境内である。前に二重の流麗な屋根の天王殿がみえる。広目天、多聞天が守護している。後代のものである。日本の鎌倉時代の四天王像等と比べてみると、緑・朱・紺の彩色が施され、随分趣きが違う。威圧感が少なく、却って親しみがある。直線に、その後に大雄殿、千仏殿、観音閣と並び、最後部に一段高くなって清涼台の毘盧殿がある。大雄殿に向って左側に僧院と蔵経室がある。足早に見て回り、門の方に戻りかけている

と、呼び止められた。僧院に入れそうだ、というのだ。三、四言外から話をして、それからかんぬきがあけられた。僧院に入れてくれた。僧籍にある私と、団長等四、五人ばかりが入った。六十歳近い、体の大きい筋肉質の、朴訥そうな坊さんが一人迎えてくれ、自室に案内してくれた。八畳ばかりの部屋である。一口も話さず、にこりともせぬが、厭うている様子でもない。話しかけてもちょっとうなづくだけである。切れ目の、坐禅をしている人の目だ。安置されている仏像に向って合掌し、一巻の経を読誦した。我々一行の名簿に「仏道世界一如」とサインしてきた。土産に拓本を頂戴した。それから経蔵に案内してくれた。これらは明蔵である、とはじめて口をきいた。続蔵もあるかと尋ねると、あると答えてくれた。しかしはっきり通じたかどうか疑わしい。明本に三種類ある。北本と南本と所謂明本である。前二者は絶えていると思われるから、普通いわれる明本であるが、これには追加された続蔵と又続蔵がある。どうもその辺のことは詳しく聞けなかった。ほとんど壊滅状態の仏教を背負っている苦しみと寂しさが滲み出ているように思われてならなかった。結局今回の我々の見学地では、坊さんはこの人が最初で最後だった。坊さんと一緒に写真を撮って別れを告げた。門を入った左側に土塀があり、一間ほど丸くくり抜いた潜り戸がある。その内側に白楽天の墓と同じ土饅頭のような形の大きな墓があった。竺法蘭の墓である。摩騰の墓は向って右側（東）にある。墓前で経を誦す。後漢永平十年（六七年）この二僧が白馬に乗ってここに到り、はじめて中国に経像をもたらしたとされ、最初の寺院白馬寺が建てられたとされている。そして四十二章経が訳出され、これが漢訳の最初であるとされている。四十二章経にも異本があり、経典自体が変化してきており、最初の訳出経典とは今は認められていない。しかし由緒ある寺には違いない。一九六一年三月国務院が白馬寺を全国重点文物保護単位とし、以護国家が保護管理している。そのため先程の坊さんは住職でもなく、最高責任者にもなっていない。この後斉雲塔を見る。囲いの内側に入れず、外側から写真を撮ったが、写真におさまりにくい大きな十三重の美しい塔であった。

十時十五分白馬寺を出て、十時五十分洛陽博物館を見学した。よく管理された博物館で、石器時代からの遺物が時代順に陳列されている。あまりにも今までいろいろと見てきたので、もはや驚かなかったが、この博物館は全国でも指折りのものと思われる。十一時五十分ホテル着。十二時昼食。午後の見学は黄河と決まった。趣きを変えたので皆喜んだ。

十四時出発。北西に向かう。郊外は道路沿いに家が並んでいる。土の家でこじんまりとしている。台地はよく開墾され、時折少しばかりの集落の見える以外は、全て畑である。三十分ぐらい行ったところで、土盛の塚が、遠近あちこちに見えはじめ

た。大小さまざまである。邙山の古い墓である。昔、貴族は、生活は杭州で、死しては邙山に埋められることを願った。そのためここに貴族の墓が多いのである。漢詩の印象からは鬱蒼とした森、高い山のある情景を想像していたが、何の変哲もない全くの平地である。多分昔は森となっていたのであろう。ある先生が漢文学の先生に、頭に画いていた情景と現実の情景の同異如何を問うと、複雑で一言で言えないと答えていたが、詩から受ける印象とはひどく違い、途惑ってしまう。私の気持も複雑だった。開墾による人為的変貌であろう。我々の囲りにもよくあることだが、長年ぶりに故郷に帰ると、近年殊にその変貌には驚ろかされる。道路がよくなり、家も現代風に立派に建替えられ、土地も整備され、商店などもでき、交通の便のよくなったことを、地元の人たちは誇らしげに言うのであるが、長年ぶりに帰った人は、相槌をうって笑顔を見せながらも、複雑な顔をする。心には昔のままの変らぬ情景を心に画いていたのである。だからそんな変りように疎外感を感じ、たまたま昔のままの一角を見付けると、ひどくうれしがる。私の気持もそんなところであろう。ありもしない昔を探し求めるよりも、現実の中国をじかにはっきりこの目で見て、真の友好を考えねばならぬのである。宗教についても、体制の違いでいかに変貌するものであるか、よくよく知っておかねばならぬ。しかし体制やものの考え方が違うと、本当に宗教心は完全に欠如してしまうのであろうか、どうか。このことはこのような旅ではとても知り得ないことであった。たまたま郊外の近くで、畑の中に新亡の墓らしいものがあり、御幣のようなものがしるしとして一本立っているのを見た。僅かな例であるが、考える材料とはなろう。それから天津であったか、葬式らしい一団にバスがすれ違った。僧侶や道士などは勿論一団の中に見かけなかったが、儀式そのもののあることは間違いあるまい。昔の墓が点在しているところを通ってしばらくすると、坂に出た。その周囲は三、四十メートルばかりの崖になっている。そこでようやく今まで通ったところが台地であることを知った。黄河の長橋に入った。立派な橋である。果てがかすんで見えない。五キロあると聞いた。一キロぐらいが川幅で、あとは草むしているか、柳が繁茂しているか、ちょっとばかり畑にした洲である。黄河は赤茶気た色である。青い空であるはずの空までが赤茶気てしまうようだ。日本ならば大河が大洪水を起こしている時のような色であるが、流れそのものは悠々としている。川波に太陽が反射してまぶしい。紫外線が痛く感じる。異様な風景である。日本のような穏やかな柔らかい風景ではない。橋の端まで走って、それからターンして戻った。時折トラックとすれ違う程度で閑散としている。川の上でバスから降り、橋の上から写真を撮った。帰ったあと写真を見たが、完全に露出オーバーで、全体が赤茶気て、やはり異様に映っていた。最新カメラも受けつけな

いらしい。日本人の体質には合わない風景である。

十六時二十分ホテル着。一日遅れの人民日報で、鈴木善幸さんが首相になったことを知る。十七時三十分夕食。

十八時二十分ホテル発、十九時三分北京行きの夜行列車に乗る。夕暮れが近づいている。汽車は混雑して、窓から乗る者もあったが、外国人観光客専用に近い軟車は定員通りである。風が勢いよく窓から入って、暑さをとばす。もう旅も終りに近づいた。互いに気心も知れた気安さも手伝って、税関で買ったブランディーを振舞い、話が賑わう。二十二時それぞれ寝台に入って寝る。むし暑く扇風機をかけづめである。汽車のゆれが気にならず、体中汗びっしょりになりながらも、疲れのためか寝てしまう。夜中に扇風機を止め、またそのまま寝てしまった。

七月十八日（金） 六時に目が醒める。車中は32℃である。七時朝食。八時四十五分北京駅着。

九時十五分バスで北京駅を出て定陵に向かう。定陵は明十三陵の一つで、十三陵は北京の北昌平県境にあり、著名な古迹の一つである。東西北の三面の山に囲まれた盆地状のところにある。神道と称される道には石碑坊、大宮門、碑楼があり、それをくぐると道の両側に石人石獣が並んでいる。龍風門をくぐると川があり、橋を渡ってなおも進むと真正面に長陵がある。見学地はそこを左（西）に折れた正面に当る定陵である。十一時定陵着。定陵は広大な前方後円墳である。墓所である地宮に入る入口は長い間わからなかったので盗掘されず、完全な形で見付かった。明の神宗朱翊鈞（万暦帝）と二人の皇后の陵墓で、一五八四年建設がはじまり、六年間の歳月、白銀八百余万両を費している。一九五六年から五八年にかけて発掘され、五九年定陵博物館を建設して、遺品を納めた。六一年国務院から全国重点文物保護単位とされた。棺の置かれていた墓所は教室を二つ並べた程の大きさである。やはり乾陵と同じ考え方で造られているようだ。博物館に飾られている皇帝皇后の冠はとりわけ豪華なものであった。壁に明末のあいつぐ農民一揆が絵に画かれ、いかに民衆の搾取によって、豪華な墓が造られたかを訴えている。しかしたとえ学問のためとはいえ、墓をあばくことには不快感を覚えた。

十二時定陵で昼食、四十分発、八達嶺に向かう。北京の西北六十キロにある。海抜八百メートル。ここは万里の長城の重要な関所であった。一時四十五分着。急な石階段を昇って楼に上った。竜蛇のくねるように山の背を縫っている。これが二千年以上も昔にできたのである。中国人民の底知れない力を深く感じた。見物客も多く、若い人達が多いためか、活気がある。二、三のグループが日本の歌を歌っていた。

十四時四十五分八達嶺発、十六時四十分前門飯店着。前門飯店は人民日報社の向かいにある。中国最後の夕食は北海公園の中の仿膳飯店でとることとした。清代皇帝の御膳房をならった

という意味で、仿膳飯店という。菜単（メニュー）をもらったが、十二品で、洗煉された味はすばらしい。形も色どりも鮮やかである。北海は大きな池（湖といってよい）になっている。そのほとりに建った豪華な建物の中で一番上等の食事をとるには、何かうしろめたい気もしないではない。しかしこれも経験である。十八時三十分から二時間かけた食事で、楽しい思い出を残した。二十一時ホテル着。

七月十九日（土）　いつものように起床、朝食、九時出発。土産物を買って北京空港に向かった。ずっとこの旅の案内をしてくれた黄さんの御主人が空港に出迎えていた。黄さんはこの時ばかりは非常にうれしそうな顔をしていた。空港ロビーで団長さんの挨拶があった。十三日間のこの旅は質量共に充実したものだった。高齢者の多い一行にもかかわらず、病気一つなく、旅も終りに近づいた。団長さんの言葉に熱いものを感じた。最後に所感を一偈に託してしめくくりとする。

大慈恩寺に真如法親王の悲壮を憶う一首　　鐵仙

眞如法師慕渡天
納慈恩寺憶窮傳
佛心科学啓空路
大道長安全竺縁

学長に和す一首　　龍栖

雁塔竹林朝雨烟
佛殿隅裡拜慈恩
朋友大道通長安
眞教凋落奈何原